
Fate/dark souls

アンバサ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / d a r k s o u l s

【Nコード】

N 3 3 7 3 Z

【作者名】

アンバサ！

【あらすじ】

闇の王。火の時代と呼ばれる、神々の時代を終わらせた不死の英雄。

なんの因果か、イレギュラーなマスターである雨生龍之介にサーヴァント召喚されてしまう。

イレギュラーなマスターと、イレギュラーなサーヴァント。両者の出会いから、運命は始まる

超更新不定期、フロム脳全壊。原作はこうで、これはこうじゃないとイヤ！ という方はおススメできません。

F a t e / 始まり (前書き)

とりま上げてみるテスト。

F a t e / 始まり

古い時代

世界はまだ分かれず、霧に覆われ、灰色の岩と大樹と、朽ちぬ古竜ばかりがあつた

だが、いつか初めての火がおこり、火と共に差異がもたらされた

3

熱と冷たさ

生と死と

光と闇と

そして、闇より生まれ出でた幾匹かが、火に惹かれ、王のソウルを見出した

最初の死者、ニト

イザリスの魔女と、混沌の娘たち

太陽の光の王グウィンと、彼の騎士たち

そして誰も知らぬ小人

それらは王の力を得、古竜に戦いを挑んだ

グウィンの雷が、竜のウロコを貫き

魔女の炎は嵐となり

死の瘴気がニトによって解放された

そしてウロコのない白竜、シースの裏切りによって、遂に古竜は
敗れた

火の時代の始まりだ

だが、やがて火は消え、暗闇だけが残る

これは暗闇の王。

人の内よりいでし不死の英雄の 運命 Fate の物語。

冬木と呼ばれる地で、惨劇とも呼べる事件が起こっていた。

場所はごくごく普通の四人の親子が暮らしていた一軒家。

しかし、今は見るも無残な有様になっていた。

部屋の隅にはズタズタに切り裂かれた四つの死体が転がり、フロアリングに鮮血を今もダクダクと流している。

そしてその鮮血を使い、刷毛でなにやら魔方陣のようなものを書いていく男がいた。

「うん、うん　今日のはうまく書き上がったなあ！」

程なくして完成した魔方陣を見て、満足げに頷く男。

染めてでもいるのだろうか？ オレンジ色の髪が特徴的な、中肉中背の20代の青年である。

いつそ優男とでもいえる容貌ではあるが、このようなことをしている段階で、まともとはいえないだろう。

「でも坊やは殺さなくてもいけたかなあ？　一回書くのに失敗しなきゃなあ……」

一家四人を惨殺したこの男は雨生 龍之介。
今世間を騒がしているシリアルキラーであり

「さて、あ・と・は・ここをこうして……いよっし、完成！」

今は自称魔術師である。

というのも、三十人あまりの犠牲者を餌食にしてきた彼だったが、つい最近になって”モチベーションの低下”という由々しき事態に悩まされていたのだ。

そこで初心忘れべからずと、ひとつ原点に立ち返ろうと思い立った龍之介は、かれこれ五年ぶりになる実家に帰省をし、自らが最初に殺した実姉と対面した時まで遡る。

物言わぬ姉との対面は、しかし、これといった感慨ももたらさず、無駄足だったかと落胆した龍之介であったが、そのとき 家人にすら忘れ去られた蔵の奥に、一冊の朽ちかけた古書と、一つの一眼球・・・を見つげ出す。

眼球といっても、もちろん本物眼球ではない。龍之介には何の材質かは分からなかったが、大きさは大体大人の握り拳ぐらいだろうか、色は白眼にあたる部分が血の様な赤色の、なんとも不気味な球体である。

古書の方も虫食いだらけであり、凄まじく年季の入った本であったが、この眼球は更に歴史を感じさせる。たとえるならば、何万年もかけて形成された自然のように、人では及ばぬ圧倒的な時間を積み重ねた物。とでもいったところであろうか、自らも殺人を芸術とし、数々の作品を手掛けてきた龍之介であったが、その自信を木っ端微塵にするような存在感と威厳を醸し出していた。

落胆から一転、龍之介は飛び上がらんばかりに喜んだ。無駄足かと思っていたのが、最後の最後でこのような物に巡り合えたのだ。これを見ていればインスピレーションも湧くだろうと、嬉々として眼球拝借する。そして眼球の由来などが書かれていないかと、共に保管されていた古書を読みだしたところ、こちらもまた龍之介のインスピレーションがむくむくと湧くような内容であったのである。

細い筆文字で、とりとめもなく書き綴られていたのは、妖術がどうのこうのという荒唐無稽な戯言だったのだ。

しかも伴天連がどうだのサタンがどうだとか、異世界の悪魔に人身御供を捧げて式神を呼び出し云々というのだから、もうまるつきり伝奇小説の世界である。

常人なら一笑に付すような内容だが、龍之介にとって本の信憑性など、もはやどうでもいい事柄であった。

流石自分のご先祖。中々にCOOLでFUNKYである。

自分もまた偉大なる先人に習おうと、早速古書にあった儀式を開始する”霊脈の地”とされる冬木の土地に拠点を移し、古書の記述の再現を行ったのである。

「いやあくいつも魔方陣を書くのに血が足りなくて失敗したけど、今回は多めに殺してよかったよかった。それでも一回失敗しちゃったしね」

これが都合四度目となる犯行であるが、その実今まで最後まで儀式をしたことは一度も無い。いつも肝心なところで血が切れ、そのまま崩しに終わってしまうのだ。

なので今回は念には念を入れ、一世帯まるまる皆殺しにした訳なのだが……

やはり、儀式殺人という新たな殺害方法に夢中になっていた

とはいえ、考える程に愚行ではなかったのかと、龍之介は思えてならない。

やはり一家四人を惨殺。ともなれば、いよいよ警察も本腰をいれるであろうし、地域の住民の警戒心も段違いに増すだろう。

とりあえず、“霊脈の地”とやらに拘るのはこれで最後にしよう。最後であるし今回はいつもどこか適当に行っていた儀式もしっかり最後までやることにしよう。

そう龍之介は心に決め、例の赤い眼球を魔方陣の中央にポンと置く。

「確か触媒、を添える……だっけ、まあこれでいいよね？」

結局古書にはなんの由来も記されていないが、一緒に保管されていたし、これが触媒とやらだろうと当たりをつけ、今ではすっかりお気に入りの眼球を置いて準備は整った。

これでサタンだか式神だか分からないが、よくわからないモノを召喚するシチュエーションは出来上がったわけである。

感慨と共に、儀式を仕上げるため、古書に書かれていた呪文らしきものを龍之介は詠唱する。

「閉じよ（みたせ）。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返しつとに四度 あれ、五度？

えーと、ただ満たされるトキをー破却する……だよなあ？ うん。

あーコホン」

もちろん龍之介も悪魔やら式神とやらが存在するとは本気で思っ

ていない。だが、あの異様な存在感を持つ眼球の存在が、もしかしたらと思わせるだけの説得力を持っていた。

故に雰囲気作りも兼ね、真面目に詠唱する。龍之介の目的はすなわち、死を理解すること。そのために内心バカっぽいとも思いながら、悪魔とやらよびだせる呪文を真面目に詠唱する。

「　　ッ!?　　告げる」

すると、不意に右手に走る鈍い痛み。それも生半可ではない痛みが一瞬だけ走り、痺れるような余韻を残す。

思わず詠唱をやめて右手を見ようとしたが、龍之介の意志とは裏腹に、龍之介の口は何か急に急かされるかのように詠唱を続ける。

「　　告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

詠唱を続けながら右手を見る。どういうわけか、そこにはいつの間にか刻んだ覚えがまったくない入れ墨のような紋章が浮かび上がっていた。トライバルのタトゥーのような、三匹の蛇が絡み合うような紋章である。

内心なかなか洒落ているなあと考えつつ、いよいよ本物かと期待が高まっていく。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

更に異変は起きる。

床に描かれた鮮血の魔方陣。それがいつしか燐光を放って龍之介を照らし、閉め切っていたはずの部屋に風が湧き上がる。

風はみるみる大きくなり、風は旋風へ、旋風は突風へと変わっていき、もはや立っていることすら危ういほどである。

更に魔方陣の燐光は輝きを増し、魔方陣の中央には霧状のものが立ち上がり、その中で小さな稻妻が火花を散らす。

龍之介は確信した。

これは本物である。夢でも幻でもない。

やはりあの赤い眼球は本物であり、自分は常識という一線を越え、まだ見ぬ未知の領域に一步踏み出し、新たなる死を理解できると確信した。

そして最後の詠唱を唱える　　ッ！

「汝三大の言霊を纏う七天！

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　　！！」

閃光。そして轟音。

と同時に、龍之介の体を衝撃が駆け抜ける。それは龍之介の体を

高圧電流で灼くようであった。

これは龍之介が知る由もないが、かつて兩生の一族に伝えられていた異形の力。今は忘れ去られ、それでもなお連綿と受け継がれてきた血によって、今日まで眠り続けてきた『魔術回路』という神秘の遺産が、今まさにこの儀式を通して目覚めたのだ。

そして龍之介に流入した”外なる力”は開いたばかりの回路を循環し、再び外部へと流れ出で、異界へと招かれし者へと吸い込まれていく。

『^{オレ}己は問う』

立ちこめる靄の中から、凜としたよく通る誰何の声が聞こえる。

いつしか耳障りな風は止んでいた。龍之介が目を開けると、光を放っていた魔方陣の輝きも消え、陣を描いていた一家四人分の鮮血は、まるで焼け焦げたかのように黒ずみ、干からびている。そして薄れゆく靄の中、再び声が聞こえた。

『^{オレ}汝が己を招きしマスターか』

これがFateの始まり。

F a t e / 始まり (後書き)

ぐだぐだになったらゴメンヨ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3373z/>

Fate/dark souls

2011年12月11日17時49分発行